

指示に従ってみんなと一緒に行動できる子

前 島 要 次

1. 対象児プロフィール

生徒名 H:M (男) 昭和49年5月10日生 (中学部1年)
鳥取市N小学校より本校中学部に入学。重度自閉症
遠城寺式乳幼児発達検査

	移 動	手の運動	基本的習慣	対 人	発 語	言語理解
発達年齢	4 : 8	3 : 4	3 : 4	2 : 0	1 : 9	1 : 6

(1) 一般的特性

- 音楽が好きで知っている曲がかかると、リズムにあわせてとんだり足ぶみをしたりする。
- 身辺処理は確立していない。
- 自分の要求が通らなかつたり情緒が不安定な時には、他の人の腕をつよくつかんだり、つねったりする。
- 偏食の傾向があり肥満である。

(2) 問題点と研究にとりあげた理由

N小学校より4月から新入学し、全く新しい環境の中での生活が始まった。友達、先生も新しくなり入学した当初はおびえているような様子が見えた。クラスの友達は、そんな本児に対して優しく語りかけて友達になろうとしているようであった。しかし、4月下旬頃になると友達の腕をつよくつかんだりすることが目立つようになった。特に本児に対しての世話を進んでしている友達に対しての攻撃が目立った。最初は本児と積極的に友達になろうとしていたまわりの生徒も、次第に本児を恐れるようになり、本児との関わりをいやがるようになった。

友達との好ましい人間関係を確立して一緒に様々な学習ができることは、将来の社会自立をめざす上でも重要なことだと考える。そこで本研究では上記のテーマを設定して、本児とまわりの友達との好ましい人間関係を確立するための指導を試みた。

2. 研究の仮説・取り組みの構想

今年度より本校、中学部に入学した本児の様子を見ているとかなりの理解言語があることがわかったが、自分の要求が通らなかつたり情緒が不安定の時などは指示をきかず、まわりの人に対して攻撃的な態度をとることがしばしばあった。そこで家庭とも連携をとりながら学校生活の中で不安感、緊張感をなくすことをめざして、最初は担任との1対1の学習からはじめ、徐々に友達とも関わりをもてるようにすすめていった。具体的には次の点に重点を置いて取り組むようにした。

- ① 日常生活の指導
 - ・着替え ・朝の活動（あいさつ、歌、合奏、日記の発表）、係活動の利用、清掃など
- ② 生活単元学習の時間
 - ・臨海学校、運動会、林間学校、学習発表会などの行事単元を中心に
- ③ 作業学習の時間（調理、木工、陶芸など）
- ④ 学校と家庭との連携による指導
 - ・生活ノートの利用、家庭での手伝いや役割分担、本児に対する家族の接し方など

3. 指導実践例

(1) 生活単元学習での取り組み——学習発表会の場合——

本単元は10月中旬より学習発表会までの約1か月間の単元で、劇、合唱、合奏の練習や準備にみんながとりかかった。劇の練習では、始めは舞台の上で大きな声を出したり、その場に座りこんだりすることが多かった。また、自分の台詞もなかなか言えなかった。朝の会、帰りの会などを利用して台詞の練習を毎日、繰り返させた。また、学校だけの練習では十分ではないと考えたので家庭での練習をお願いした。


学校と家庭との連携の中で毎日の反復練習により劇参加への抵抗も少なくなり、出番の指示だけで小さな声だが台詞が言えるようになった。学習発表会の当日は自分の出番がくるまで静かに待つことができた。練習通りに演じることができ大成功だった。学習発表会の翌日、母親から次のような便りが届けられた。

(家庭での様子)

劇は初めての経験でした。台本を受け取ってみるとライオンの役だということ。それからは毎日、食事の仕度、ドライブ、風呂の中、とにかく顔を合わせると「ウオーウオー」、しまいにはお兄ちゃんも「うるさいな」と言うほど子供と一緒に言ってやりました。「ライオンの声」と言うだけで自分から「ウオーウオー」と言い、後の台詞も自然と出てきました。練習ではすんなり言える台詞も、いざ本番ではいつもアクシデントの起る彼には、さあどうなるのかとても心配でしたが、先生と一緒に舞台上でしかも笑顔で客席の方に目をやりながら堂々とやってくれたこと、やれやれと安堵の胸をなでおろしました。

(2) 作業学習での取り組み——木工の場合——

学習の概要および指導方針は次に示す通りである。

学習活動	本児に対する配慮事項	本児の活動の様子
① 木材、金づち、釘を準備する。 ② 釘で模様を付ける。  かたつむりの模様	① 道具などを準備する時は指導者と一緒に取りに行かせる。 ② 釘を立ててやり板に釘が浅くつきささるところまで手を添えて作業させる。 落ち着いた気持ちで頑張れるように声かけをしながら作業に取り組みさせる。	① 指示をして指導者と一緒に取りに行くことができた。 ② 釘を印の箇所にも真直ぐに立てることはできるが、金づちを真直ぐにふりおろすことが難しく、一人で打つと曲がってしまう。手を添えてやれば真直ぐに打てた。途中で「もういい」と席を立ちかけたが、

		声かけにより作業を続けることができた。
⑤ 後始末をする。 ・釘、金づちを元の位置に置く。 ・釘が床に落ちてないか確認する。 ・室内の掃除をする。	⑤ 後始末は指導者が指示を与え友達と一緒にさせる。	⑤ 自分の使用した金づち、釘は友達と一緒に元の位置に置くことができた。また、指導者と一緒に床の上に落ちている釘を見つけ出し釘入れに置くことができた。

この時間は整理箱作りの3時間目にあたり、側面に釘で模様を付ける学習である。この題材の前に定められた箇所に釘を打ちつける練習、壁飾りの作品作りを生徒は経験してきており道具の扱いにも慣れた時点での実践であった。1学期の前半では金づちを持っても、すぐにおもちゃのようにいじったり、釘を持たせると転がして遊ぶということが続いた。最初は手を添えてやり作業を繰り返した。1か月後には数は少なく真直ぐに打つことは難しいが、道具の扱い方がきちんとできるようになった。この整理箱作りでは釘を真直ぐに打つことが目標だが、本児に対しても見通しがもてる作業であった。

(3) 学校と家庭との連携による指導

新しい課題に向かう時、すぐに情緒不安におちいり友達などの腕を強くつかんだりする本児に対して、学校生活の中で成功経験を味わわせながら安定した生活ができるように環境を整え、スモールステップで学習を進めてきた。しかし、本児の学習効果は学校の指導だけではなく家庭との密接な指導体制を作って取り組んだことが有効に働いていると思う。具体的には家庭訪問、生活ノートを通して保護者の願いや悩みを聞き、学校と家庭で同じ歩調で指導と取り組むところから始めた。また、家族が学校生活に不安を持っていることがわかったので、本児の生活についてはどんな小さなことでも生活ノートで連絡をするようにし、お互いに連絡を密にしながら信頼関係を築きあげていくようにした。ここでは家庭との連携による指導の一端を紹介してみたい。

① お手伝いを通して成功経験を味わわせる。

本児の家庭でのお手伝いは、ごますり、天ぷらを揚げる手伝い、食器洗いなどが具体的内容である。毎日、継続して行っているので見通しがもて、家庭でも喜んでお母さんと一緒に時間一杯やっているようである。学校でも宿泊学習の中で家庭のお手伝いと同じ仕事を



をとり入れ、本児が自信を持って食事の準備や後片付ができるように配慮している。これまで4回の宿泊学習を行ってきたが、友達と一緒に食事の準備、後片付で自分の役割分担をきちんとでき、喜んで参加することができた。

4. 結果の考察と反省

1年間の指導を通して本児の変容の様子を見ると次のようになる。

	取り組み当初（一学期はじめ）	現 在（一学期後半）
日常生活の指導	<ul style="list-style-type: none"> 朝、登校して教室に入ると落ち着きがなく歩き回っていた。更衣室にもなかなか行けず、更衣の時間も長かった。 朝の会、係活動では自分の仕事を途中でやめて他人まかせにすることが多く、注意すると腕を強くつかんだ。 	<ul style="list-style-type: none"> 寝不足の時は落ち着きがないこともあるが、指示されると仲の良い友達と一緒に更衣室に行き、更衣の時間もかなり短くなった。 朝の会、係活動では指示によってみんなと一緒に行動できる時間が長くなってきた。
掃 除	<ul style="list-style-type: none"> 掃除の時間では掃除ができず教室の中を歩き回った。 	<ul style="list-style-type: none"> 道具の扱いにも慣れ指示によって自分のしなければいけない仕事ができるようになった。
行事参加	<ul style="list-style-type: none"> 臨海学校では班の役割分担などを決めて準備をしたが、友達と一緒にできず場を離れることが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> 林間学校ではクラスをといて班編成を行い準備を行ったが、指示によって友達と一緒に荷物の整理などができるようになった。
作 業	<ul style="list-style-type: none"> 陶芸の時間では席にじっと座って作業ができず、粘土を水にぬらして遊んだりすることが目立った。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導者がそばに一緒に座ってやり、声かけをしてやると模倣して作業ができるようになってきた。

まわりの環境にとけこめず、最初は友達の腕を強くつかむという攻撃的な態度をとり、まわりから孤立してしまった本児も着実に変容していることがわかる。担任に対しても最初は腕を強くつかみかかっていたが、1学期の終り頃には「はなしなさい」という指示ですぐにはなすようになり、2学期に入ると腕につかまるという態度に変わっていった。担任の指示もうけ入れられるようになり、そばにいてやれば仕事に時間一杯、取り組むような態度も育ってきたように思う。

今後さらに見通しをもって仕事に取り組み、友達との関わりの中で活動ができるような指導を継続していきたいと思う。また、家庭との連携のあり方についても深くほり下げて考え効果的な指導を追究していきたいと思うのである。